

「内なる他者」と「間主観性」の接点

ーアンリ・ワロンと D.N.スターンの発達論の比較からー

太 田 列 子

I. はじめに

乳幼児はどのようにして自己と他者を区別するようになり、「私」という概念を打ち立てるのであろうか。この「自己感」あるいは「自我意識」の発達は自己の形成にそのままつながり、他者との関係性や他者表象と表裏一体のものである。すなわち、私のからだ、私の考え、感情、行動のすべてが“私”であり、人間と人間の自我との間に、独特な所有関係が存在している。私のからだ、考え、行動や感情は、私を意味すると同時に、私の現れ方である。個人は、単数の一人称のものとして、自己である“私”を“他人”からはっきりと区別することができる。しかし、この能力は新生児の場合には未分化であり、回りの人物や物事から自己を独立した人間として区別することができず、“自我”には新生児が感知する外界も含まれる。自我の展開、個の確立は長く、複雑な過程の結果で、乳幼児期はその長い過程の一つの節目にすぎない。

前世紀初頭の発達心理学者であるピアジェ、ワロン、ヴィゴツキーらは、子どもが回りの環境の中で“他人”を発見し、「私を体験する」のか、それとも回りのすべてのものを含む総合的な「かたまり」の中から徐々に“自我”が独立し、自分と関係なしに存在する“他人”を発見し「自我を体験する」のか、について論争を繰り広げたが、自分と他者、私と私でないものの分離は同じ過程の両面なのである。

ピアジェとワロンは同じ時代、同じフランス語圏にあって同じように発達理論を構築したが、その方向は異っており、ピアジェが個体発生の視点を基本としたのに対し、ワロンは関係発達の視点から発達について記している。ピアジェによれば、知能は他の諸領域とは切り離された特権的な領域であり、その発達を構造的に整理することによって、人間の全体性を見ていこうとする。ピアジェの描く筋書きはある意味単純で分かりやすいが、その単純化によって人間の全体性を捉え得たかという疑問である。これに対してワロンは、パーソナリティという、生理・心理・社会的な意味での人間の全体性をそのまま視野に入れ、その発達過程を見ていこうとする。したがって、ワロンの理論が難解に見えるのは、人間を常に全体として捉えようとするその方法のためであり、人間自体の難解さから来ていると言えよう。

ピアジェの発達論は今日の日本の教育論のバックボーンになっているが、子どもを個的な存在

と見て、彼がどのようにして科学的な論理を身につけていくかを後づけている。しかしワロンによれば、子どもは個的存在ではなくて、他者との共同関係の中で生きているのである。

本論の目的は、心理学者であると同時に精神科医でもあり、児童心理学の分野でフランスにおいて特異な存在であったアンリ・ワロン (Henri Wallon, 1879~1962) の、子どもにおけるパーソナリティの発達について記述し、パーソナリティの個別性と一般性の発生する道筋を見えるものにするのである。そのため、子どもの心理的発達に付いてのワロンの一連の論文 (Wallon, 1941;1946;1947;1956a;1956b) を滝沢 (1960)、波多野 (1983)、浜田 (1983) らの邦訳をもとに要約することで、「胎児段階」、「衝動的運動性の段階」、「情動的段階」、「感覚運動的活動の段階」、「自己主張の段階」、それから「思春期」の前段階である「多価的パーソナリティとカテゴリー的思考の段階」に至るまでを再構成する。さらに、近年の乳幼児精神医学の第一人者であるダニエル・スターン (Stern.D.N.) の乳幼児に関する研究との比較によってワロンの今日的意義を明らかにする。

II. ワロンのパーソナリティの発達段階

ワロンによれば、子どもの発達は何人と環境とのあいだの絶えまない応答によって、生理—心理—社会的に全体として行われており、しかも行きつ戻りつするものである。年齢による区分がされていないが、ここでは他の発達理論との比較のために便宜上区分して表1にまとめる(表1)。

ワロンの自己意識の形成は3つの段階に分類される。第一段階は自分と環境とが混ざり合っている未分化な段階、第二段階は外界との接触が強まり自分の感受性が洗練される段階、第三段階は対立と抑制を通して自立へと向かう自己主張の段階である。

1. 自己と環境とが未分化な段階 (胎児段階・衝動的運動性の段階・情動的段階)

1) 胎児段階 (受精～誕生まで)

この段階では母体が胎児の要求にすべて応えるようになっており、生物学的に完全に母体に依存した状態としての、母子間の「生理的共生」が特徴である。しかし、妊娠4ヶ月以降からは、胎児は母体内部の刺激や母体を通じた外部からの刺激に対して、姿勢反射による運動反応を示すようになる。外からの働きかけが胎児の神経系を通過していくことは明らかであり、すでに胎児とその胎内での生活条件は二重性をなしている。

2) 衝動的運動性の段階 (誕生～1歳6ヶ月)

表1 ワロン, ピアジェ, エリクソン, フロイト, マーラーの発達理論の比較

		ワロン	ピアジェ (1986)	エリクソン (1977)	フロイト	マーラー (1972)		
胎児期		胎児段階 生理的共生						
乳児期	1ヶ月	衝動的運動性の段階	感覚運動期	信頼対不信	口唇期	正常な自閉期		
	2ヶ月							
	3ヶ月							
	4ヶ月	情緒的共生				第3段階	正常な共生期	
	5ヶ月							
	6ヶ月							
	7ヶ月	情動的段階				第4段階		分化期
	8ヶ月							
	9ヶ月							
	10ヶ月							
11ヶ月								
12ヶ月	感覚運動的段階・歩行と言葉の発達	第5段階	自律性対恥・疑惑	肛門期	分離・固体化期			
13ヶ月								
15ヶ月								
幼児期	18ヶ月	融即の段階・投影的段階	象徴的思考			再接近期		
	2歳							
幼児後期	3歳	自己主張の段階 (対立と抑制の時期・自己愛期・模倣期) コンプレックスの形成	前操作期	自発性対罪悪感		固体化期		
	4歳							
児童・少年・学童期	5歳	分化による多価的パーソナリティとカテゴリー的思考の段階	直感的思考	勤勉性対劣等感		情緒の対象恒常性		
	6歳							
児童・少年・学童期	7歳		具体的操作期		潜伏期			
思春期・青年期	12歳	思春期・青年期 (自我の欲求・感情の両価性)	形式的操作期	同一性対同一性拡散	性器期			
成人期	22歳～			親密性対孤立				
壮年期	30歳～			生殖性対停滞				
老年期	65歳～			統合性対絶望・知恵				

ジンバルドー (1983) 及びマーラー (1972) を修正・加筆して作表。

胎児は出生とともに外界の大気の中に出る。産声によって最初の呼吸反射が起こり、自分で呼吸することで、呼吸に限定されるものの自律性を獲得する。このような獲得行為が以降、様々なことに対して続けられる。新生児が外界から得る刺激と外界への反応は、すべて欲求をめぐるものであり、しかも欲求は母親によってはじめて満たされるため、真の共生状態にあるといえる。

しかし、胎児期とは異なり、欲求発生とその充足との間に時間的なずれが生じ、そこで新生児は胎児期には無かった待つ苦しみや、奪われる苦しみを感じる。この苦しみは、身体痙攣や、泣くといった衝動的運動によって訴えられる。

生後1ヶ月末から2ヶ月の初頭にかけて、母親との間で相互的な微笑が見られるようになり、「情動の擬態」が出現する。この段階の子どもには主体と客体の区別は不可能であるが、相手に見た微笑の視覚的イメージと、それによる自分自身の運動感覚とのあいだにはつながりがあり、それによって一体感が生じる。

3) 情緒的共生 (3ヶ月～6ヶ月)

生後2、3ヶ月目には、子どもは直接母親に対して泣き声を発することで、世話を求めたり微笑や満足の表現もするようになり、さらに世話人が自分から離れたたりそばにいた人が離れただけでも、泣き出したりするようになる。これらは、周囲との関係における情緒的な結びつきの成立を示しており、その後、子どもと周囲との繋がりは身振りによる表現を介して段々と固まっていき、また多様化していく。

4) 情動的段階 (6ヶ月～1歳)

6ヶ月頃からは「情動的段階」へと展開する。母親と子どもとのあいだには、動作や態度、身振りなどによる相互理解のシステムが出来あがるが、その基盤は全て情緒的なところにある。この時期におけるあらゆる種類の発達は、情緒の果たす役割が非常に大きく、母親との真の「情緒的共生」である。この段階で子どもは、怒り、苦痛、悲しみ、嬉しさなどあらゆる種類の情動のニュアンスを表現できるようになる。

子どものまわりの者が子どもとのあいだで様々な動機に基づく関わりを持つことで、子どもの豊かな情動表現が開かれると、同時に社会性が急速に広がる。周囲と密接な結びつきが培われ、身近な他者と自分とが区別できないほど親密になるため、子どものパーソナリティは自分にかかわるすべてのものに拡散しているように見える。これは「徹底的主観主義」の時期であり、「主観的癒合」が起きている時期である。従って子どもはまだ他の人を個別的存在として区別して捉えているのではなく、自分の主観的環境世界のなかにおいて、その人が一定の役割を担っている場合にのみそれを区別しているにすぎない。

生後7、8ヶ月目になると、二人の子どもが互いに対比的な役割や相補的な役割を担ったり、あるいは互いに似た役割を取ったりすることが見られる。この段階においては互いの役割交換が可能ではなく、自分たちの意志では自由にならない場面状況による関係の固定化によって、役割が自動的に振り分けられている。

この時期の子どもの自我はまだ情緒的共生状態にあり、感受性も未分化な状態であるが、そこにはすでに二極性があり互いに異なった役割が含まれている。最初の頃は、この二極性から単なるずれの感覚や驚き、ときに不安の感情が生じ、それらはもっぱら情緒的に表現されるだけであ

る。やがて子どもは自分の予期や意図と実際の結果との関係に不調和を感じ、その源までさかのぼろうとする。そして場面を能動と受動のふたつの相に分断し、交替的なやりとり遊びを通して、この発見を吟味するようになる。

2. 外界への積極的な探索活動と感受性の洗練の段階（感覚運動的活動の段階・融即の段階と投影的段階）

5) 感覚運動的活動の段階（1歳～1歳6ヶ月）

生後1年目の終わり頃から2年目の初めには、外界に対して関心が向けられるようになる。この段階の特徴は、子どもが歩行によって自由に空間を移動し、言葉によって自分の意図や要求を表現できるようになって、様々な依存や制約から解放され自由になるということである。能動的空間移動によって、これまで継時的にたどっていた色々な環境を、ひとつの連続空間の中に統合し、物の相対的な位置関係の感受ができるようになる。

6) 融即の段階と投影的段階（1歳6ヶ月～2歳）

この時期の子どもは実際に行動しその場面を体験しないかぎり、まだ場面を表象することは不可能である。このような知能の「投影的段階」には、人格発達の「融即の段階」が対応している。

生後2年目に入ると、自他の相互反応はさらに発展を遂げ、これまでのような自動的なものではなく、まだ主体の自律意識によるものではない。1歳5ヶ月頃からは、子ども同士の遊びに加わり交わろうとするようになり、他の子どもの模倣や同じ遊具を共にいじることも見られる。また、泣いている子どもを見ると、慰めたり、いたわりの関わりをするようになる。

2歳でも、子どもの自我は他者によって補完される必要がある。この時期の子どもは年長者の指図に非常に敏感になり、あたかもこのような支えがなければ、自分自身が意志を持たないかのようにみえる。だが、2歳6ヶ月頃に至ると、子どもは単なる融即によってではなく、他者それ自身に関心を持つことができるようになる。つまり、同時に意識したものがひとつに混ざり合ってしまう、外界に属するものと自己に属するものが癒合した状態であったのが、自分の受け取る様々な印象の中から自分に属さないものを分離して、自分のパーソナリティと混同しないようになる。そのためには、周囲の他者との一連のやりとりを経験しなければならない。それが「交替やりとり遊び」である。

他者との役割の交換、あるいは同じひとつの場面の二つの極を往来する行動や遊びによって、子どもは働きかける者と働きかけられる者という、二重性を認識するようになる。しかし、まだ個人の主体は確立されておらず、子どもが自己の人格構成を果たすと考えられる自我意識を持つには、自我が他者に対する安定性と恒常性を備えていなければならない。この時期の子どもの自我は、まだそうした恒常性や安定性の獲得が果たされていない。

子どもは遊びを通して、最後に他者のパーソナリティを発見する。つまり、交互に演じる役割

によって自我が対峙する他者にはっきりと対置され、未分化であった自己の感受性の内に、他者が他者として認識されてゆく。自我と他者の区別は、実在の他者との関係を単に抽象的に写し取ったものではない。それは、子どもの内面で行われる二項分割の結果であり、一方は自己との同一性の確立を担い、他方はこの同一性の保持のためにそこから排除せざるを得なかったものの縮約なのである。

3. 対立と抑制による自立の段階（自己主張の段階・多価的パーソナリティとカテゴリー的思考の段階）

7) 自己主張の段階（3歳～5歳）

交替やりとり遊びによって自我と他者との分離状態が用意され、自他の分離が生じる3歳頃が「自己主張の段階」のはじまりであり、同時にパーソナリティが危機に瀕するときでもある。この段階は、子どものパーソナリティが拡散した状態から収縮し、周囲に対して抵抗の核となり、ついで周囲のものを占有しようとする闘争的な時期である。この闘争的な段階は、外的に存在する物のレベルにはじまり、動機と行動、そして思考と反省のレベルで、順に自我の境界が明確になり、さらに境界が安定することで、次第に沈静に向かう。この段階は、①防衛と権利主張の時期（3歳頃）、②自分を立派に見せかけ、他者からの同意を得ようとする時期（4歳頃）、③他者の取り入れによる模倣的従順がより顕著になる時期（5歳頃）の三つの時期に区分することができる。それぞれが互いに対立する様相を示すものの、自我の自立と豊富化を目的とする点においては同じである。

3歳に至ると以前の交替遊びから脱却し、一人二役の遊びも減少する。子どもが鏡に映った自分の姿を見分けられるようになる鏡像認知も、この頃に可能となる。また、それまでは周囲から呼ばれるままに自分のことを三人称で呼んでいたが、そういうこともなくなる。そして、このときから「わたし」とか「ぼく」という一人称が正しい意味において用いられる。さらに、子どもの自我意識が色々な物に波及していくと、これまでの形式上の区別にすぎなかった自己と他者が明確な内容をともなって区別され、「わたしのもの」「僕のもの」というかたちではっきり所有の意味を持つようになる。

6歳未満の子どもで、一人称によって自己を意識するようになってからまださほど時間がたっていない場合には、決して自分に対して三人称を用いることはない。このような子どもは、まだ遊びのなかで、虚構によって自分を二重化することが出来ない。自分自身を客体化できてはじめて、遊びにおいて三人称単数を用い始める。自我の意識化が可能になった後に、再度三人称の使用がなされるのは、ある種の虚構によることを意味しており、それが可能となる「遊戯的象徴化」の段階には、この意識化の確立が充分になり、柔軟なものとなっている必要がある。

子どもが交替遊びや一人二役的遊びから、二役を交替的に演じることを止め、一人になってい

く場合、一方の一人が消えてしまうのではなく、「第二の自我」となり内在化される。ジャネが「社会的自我」と呼称したものであるが、それは分身として自我と共存する、自我と離すことの出来ない重要な要素である。この第二の自我にはこれまで現実に関わってきた多数の他者が含まれていて、内面世界と周囲の具体的世界とをつないでいく媒介者の役割を担っている。一般的に第二の自我は二人称的であり、他者は三人称的である。

8) 多価的パーソナリティとカテゴリー的思考の段階 (6歳～11歳)

6歳から11歳にかけての「多価的パーソナリティとカテゴリー的思考の段階」に到ってはじめて自我と他者は概念としても機能でき、一人称から見た二人称、三人称の機能と、二人称、三人称から見た一人称の機能が働くことによって、自体感覚が成立したことになる。子どもは自分を指示する様々な代名詞の区分によって、自分自身を眺める多様な観点をもった、多価的パーソナリティであることを学んでいけるようになり、もはや自己をやみくもに他人に対立させたり同一視したりするのではなく、あるいは変化の中で限りなく自分を分散させてしまうのでもなく、状況に応じて柔軟に関係のとり方を変えてゆくことが可能となる。

Ⅲ. スターンとの比較によるワロンの再評価

以上、ワロンのパーソナリティの発達理論について要約した。ここではワロンとスターン (Stern.D.N.,1985a,1985b) を比較しながらその類似点と相違点について述べて行きたい。自我の芽生えを考えると、「自分」という存在は一体どのようにして意識されていくのであろうか。

近年、アメリカにおける乳幼児精神医学の分野では、発達理論研究と臨床的経験の両者を統合する方法論が進められている。その流れに関し、小此木 (1989) はスターンをその第一人者であるとして、「フロイトが提示した母子相互作用と乳幼児における心的機能の成り立ちについての着想を、現代的な形で実現する役割を担っている」と述べている。

このような発達臨床的視点からは、関係における子どもの自己の発達がどのようなプロセスを経ながらすすんでいくのであろうか。

スターン (1985b) は、「同じスペクトル上の両極端」としながらも「他者との未分化期を想定し、自己が成熟して他者から独立するという概念 (たとえば分離-個体化論などに代表される伝統的な精神分析理論)」と、それに対して、自説の「自己-他者」というずっと大規模な作業上の装置 working set を絶え間なく構築し、再構築するのが成熟に伴う目標であるとする概念」という二つの考え方について、次のように論じている。前者の「未分化」理論は、人間存在の「共にある」状態における結合感、愛着感など基本的な感覚を所与として扱い、それを発展、獲得するのに積極的な過程を必要としない。それに対して、スターンの観点では、そのような感覚が乳

児期のある時期に起こり、それが人間的結合の情緒的貯蔵器としての機能を果たすという考えに変わりはないが、その過程は受け身的なものや先駆的に与えられたものにとらず、自己を制御する他者との交流の表象に対する、乳児による積極的な構築の結果であり、自己感と他者感の形成にそって形をなしていくものであると強調している。そして、その始まりにおいて、他者は意識的にしろ無意識的にしろ、他者と共にある自己の体験の記憶ないしイメージという形でのみわれわれの「内部」に存在するとも論じている（武藤，1993）。

子どもが発達のある時点で「心の個別性」に関する理論や作業過程を獲得し、人と共にあるという主観的体験あるいは間主観性を有するとするスターンは、また、その著書の中で発達心理学の出発点として、自己と他者の主観的体験を重視した先駆者としてワロンを認めている（Stern, 1985a）。近年のこうした発達臨床研究の流れを見ると、我々が再びワロンに立ち返ってその発達理論における個別性と一般性について再検討する必要があるのではないだろうか。

これまで述べたように、ワロンによれば自己意識は「自分と環境が混ざりあっている未分化な段階」「外界との接触が強まり、自己の感受性が洗練される段階」「対立と抑制を通して自立へと向かう自己主張の段階」の三段階により形成される。

生まれてすぐの子どもは一人では生きていけず、放っておけば確実に死んでしまう「無力」な存在である。そのため、母親やそれに代わる人物に全てにおいて依存して生きている「生理的共生」の状態にいる。これが第一段階の状態である。その後、子どもが養育者や他者と感情やそれに伴う行動や態度を示すことで、情緒的な交流が現れ、それまで生理的な緊張と弛緩の現れであった情動が欲求を表すものに変化していく。このような中で子どもは自分の行為の意図に対して、周りの人がどのような反応を示すかということを学習していく。6ヶ月頃の「情緒的共生」の時期になると、子どもがこれまでに学習してきた、自分の行為の意図に対して周りの人が起こすだろうと予測された反応と、実際の結果にズレが生じることを感じる。これが第二段階の状態である。そして第三段階になると、第二段階で感じたズレがなぜ生じるのかと、原因を突き止めようとする。それによって子どもは自我の二重性を確立していくとワロンは主張している。

スターンによれば、出生からの2ヶ月間、乳児はあらゆる知覚様式を通じて外界の出来事を活発に取り入れる「新生自己感」。生後半年間に①自分の行為はこの自分が行っているという感覚、②身体は境界線を持つ単一のまとまりで一貫性を持ち、これが行為を行うという感覚、③自己の同一の経験に対しては同一の感情が経験されるという感覚、④同一の存在であり続ける一方、その連続性を保ちつつ変化できるという感覚の4つがひとまとまりになった「中核的自己感」。生後7～9ヶ月には、他者にも心があり、他者との間で内的主観的体験が共有可能であることを学ぶ「主観的自己感」。生後2年目には、言語の獲得によって自己を客観視し、他者と意味を共有、伝達できるようになり「他者と共にあること」の新しい方法を獲得する「言語自己感」の4つの自己感があるとしている（1985a）。

また、関係の発達について、ワロンの理論では、自己－他者関係において外的行為として行われるやり取りを通して、自分自身の感受性の内部に「内なる他者」による他者性を認識していくという過程が示されている。このような「内なる他者」は、乳児期、幼児期においても、他者との間で取り結ばれた相互関係を媒介として形成されていき、それぞれの時期における「自己信頼」と「道徳性」の発達の基盤を築いていくと考えられる。

一方スターンは、乳児の関係の認識の成立について、感覚運動的経験が他者についての内的な表象を統合すると同時に、外界では他者から自己を切り離していくという、分離－固体化で表現している。しかし同時に、スターンは分離－固体化以降について、マラーの生まれたての乳児は自己／他者未分化状態にあり、分離－固体化の完成を成熟のゴールとする説に対して、自己と他者との主観の一体感は、他者と共にある自己としての健全な体験を統合したことによる望ましい結果である（神庭，1989）としている。

母子関係における相互作用についてワロンは、生後1ヶ月末から2ヶ月の初頭にかけて、母親との間で相互的な微笑が見られるようになり、「情動の擬態」が出現するとして、この段階では子どもには主体と客体の区別は不可能であるが、相手に見た微笑の視覚的イメージと、それによる自分自身の運動感覚とのあいだにはつながりがあり、それによって一体感が生じるとしている。また、生後2、3ヶ月目には、子どもは周囲との関係における情緒的な結びつきが成立するとして、その後子どもと周囲との繋がり、身振りの表現を介して段々と固まっていき、また多様化していくとしている。さらに6ヶ月頃からは「情動的段階」へと展開して、母親と子どもとのあいだには動作や態度、身振りなどによる相互理解のシステムができあがるが、その基盤はまったく情緒的なところにあり、この時期におけるあらゆる種類の発達には情緒の果たす役割が非常に大きく、それは母親との真の「情緒的共生」であるとして、この段階で子どもは、怒り、苦痛、悲しみ、嬉しさなどあらゆる種類の情動のニュアンスを表現できるようになるとしている。

これはスターンのいうところの「情動調律」の概念とほぼ重なるように思われる。スターンによれば、情動調律は生後9ヶ月以降に母子間に見られる特徴的な情緒的相互交流のパターンであり、主観的自己感の領域において、言葉が話せない乳児が母親と情動状態を共有する方法である。情動調律は日常の母子の交流に見られ、他者と「共にある」「共有する」といった感情を呼び情動状態の共有を可能にするものであるとしている。

この二人の相違点はこうした母子間に見られる相互作用の時期であるが、これはワロンが原初的な模倣にも似た段階から母子間の情緒的なやり取りを捉えているのに対して、スターンは、情動調律の完成する時期として、生後9ヶ月という時期を指定していると考えられる。

さらにスターンは、発達心理学で観察される被観察乳児 *observed infant* に対し、臨床場面における成長した患者と、乳児経験に関する理論をもつ治療者の協同創造物としての臨床乳児 *clinical infant* を想定し、乳児の自己感の発達について考えていく際、この2つのアプローチのどち

らもが欠かせないとして「臨床乳児は被観察乳児に主観的生活の息吹を吹き込み、一方、被観察乳児は臨床乳児の主観的生活を推論、構築する際の基礎となる一般理論を導いてくれる」としてしている。初めに述べたワロンの「混同性」も、観察される側の発達の問題と観察する側の観測・認知の問題との、両方の問題を含んでいるように思われる。これは両者共に、観察者がはたして観察の対象となる子どもを正確に観測できるのかという問題に関わってくるであろうし、なによりも観察者よりの理論から、観察対象に近付いていこうとする態度なのであろう。

スターンは従来の精神分析的発達モデルを批判し、これまでの精神分析理論では、発達が一つの段階から次の段階へと継続的に進み、ある問題に感受性の強い、特定の発達段階があるとしているが、スターンにおいては4つの自己感、新生—中核—主観的—言語自己感という一定の順序で出現するものの、それらはひとたび出現すると一生涯にわたって休むことなく活動し続けるとしている。ワロンの発達段階論においても、発達段階は行きつ戻りつするものであり、何よりも生理—心理—社会的な意味における人間の全体性を、その発達過程において捉えようとする視点において、ワロンとスターンは同じ立場に立つと言えよう。

IV. おわりに

人の心の働きをさまざまな部分的機能や行動単位に分割して、個々に精密に分析するのが近代における心理学の一般的スタイルである。それは科学的研究のための戦略としてはたしかに有効であり不可欠であるが、心理学本来の目的は、人間を全体として理解することにある。ところが心の働きを一度部分に分割すると、研究者はそれだけで全体を理解したように感じて満足してしまい、もとの全体に還元する試みがおろそかにされがちである。部分だけを取り出したときの働きと、全体のなかに戻したときの働きとは大きく異なる可能性が高く、なによりも、部分的機能の意味は全体のなかで初めて明らかになるはずであるが、そういった側面は忘れられがちである。

このような近代心理学への批判から C. R. ロジャーズによって、統合的、総合的に人間を理解し、関わろうとする人間性心理学 (humanistic psychology) が創始された。発達心理学も同様に心の働きを分割して理解するが、研究の出発点が各年齢段階 (発達段階) の子どもの特徴を理解するところにあったために、それぞれの時期の子どもを全体としてとらえようとする視点が、多少なりとも保持されているのであろう。それは、現実に具体的に存在するのは、つねに一個の全体としての子どものみだからであり、その意味でスターンに代表されるように、近年の臨床発達心理学は、科学的心理学のなかではめずらしく、そのような全体論的視点を掲げていると言えよう。

文 献

- 青柳肇ら (1996) パーソナリティ形成の心理学 福村出版。
- Erikson, E.H. (1950) *Childhood and Society*. Norton, New York.
- 亀谷和史 (1996) 1950年中葉の「ピアジェーワロン論争」. 加藤義信, 日下正一, 足立自朗,
 亀谷和史編訳著 (1996) ピアジェーワロン論争—発達するとはどういうことか. p.141-176. ミネルヴァ書
 房.
- 神庭靖子・神庭重信 (1989) 小此木啓吾監訳 (1989) 乳児の対人世界 理論編. p.233-236. 岩崎学術出版
 社.
- Mahler, M.S. (1972) : On the First three Subphase of the Separation-Individuation Process. *Int.J. psycho-Anal.*,
 53 : 333.
- 松村康平 (1982) 関係学の現状と展望. 関係学研究. 10p.69-75.
- 武藤安子 (1993) 発達臨床—人間関係の領野から—. 建帛社.
- 小此木啓吾 (1989) 小此木啓吾監訳 (1989) 乳児の対人世界 理論編. p.i-xiii 岩崎学術出版社.
- Reich, W. (1949) *Character Analysis*. Orgone Institute Press, New York.
- Stern, D.N. (1985a) *The Interpersonal World of the Infant*. Basic Books, Inc. 小此木啓吾監訳 (1989) 乳児
 の対人世界 理論編. 岩崎学術出版社.
- Stern, D.N. (1985b) *The Interpersonal World of the Infant*. Basic Books, Inc. 小此木啓吾監訳 (1991) 乳児
 の対人世界 臨床編. 岩崎学術出版社.
- Wallon, H. (1932) *Les origines du caractère chez l'enfant*. Presses Universitaires de France, Paris. 久保田正
 人訳 (1965) 児童における性格の起源—人格意識が成立するまで. 明治図書出版.
- Wallon, H. (1941) *L'Evolution psychologique de l'enfant*. 滝沢武久訳 (1960) 子どもの精神発達. 科学
 としての心理学. 誠信書房. p.111-153
- Wallon, H. (1942) *De l'acte à la pensée*. Flammarion, Paris. 滝沢武久訳 (1962) 認識過程の心理学—行動
 から思考への発展. 大月書店.
- Wallon, H. (1946) *Le rôle de «l'autre» dans la conscience du «moi»*. *J. Egypt. Psychol.* 浜田寿美男編訳
 (1983) 『自我』意識のなかで『他者』はどのような役割をはたしているのか. ワロン／身体・自我・社会.
 ミネルヴァ書房. p.52-72.
- Wallon, H. (1947) *L'Evolution psychologique de l'enfant*. 波多野完治監訳 (1983) 子どもの心理的発達.
 ワロン選集 (上), 大月書店, p.117-152.
- Wallon, H. (1956a) *Niveaux et fluctuations du moi. L'Evolution psychiatrique. I.* 浜田寿美男編訳 (1983)
 自我の変動とその水準. ワロン／身体・自我・社会. ミネルヴァ書房. p.23-51.
- Wallon, H. (1956b) *Les étapes de la personnalité chez l'enfant*. 浜田寿美男編訳 (1983) 子どもにおける
 パーソナリティの発達段階. ワロン／身体・自我・社会. ミネルヴァ書房. p.231-244.
- Wallon, H. (1959) *Du behaviorism à la psychologie de motivation*. 波多野完治監訳 (1983) 行動主義か
 ら動機づけの心理学へ. ワロン選集 (下). 大月書店. p.117-184.
- Werner, H., and Kaplan, B. (1963) *Symbol Formation*. Wiley, New York.
- 山内宏太郎編著 (1997) 人間の発達を考える 北樹出版.
- ジンバルドー, P.G. (1983) 古畑和孝・平井久監訳. 現代心理学Ⅱ. サイエンス社.